

大阪府保育士会だより



# ほほえみ

平成 27 年 3 月 31 日  
第 100 号

大阪府社会福祉協議会  
保育部会・保育士会  
大阪市中央区中寺 1-1-54  
TEL 06-6762-9001

平成 27 年度から新制度がスタートし、皆さまの施設においても、幼保連携型認定こども園、保育所型認定こども園、保育所、と進み方が異なります。この変革の時に、保育士会の機関紙「ほほえみ」が 100 号を迎えることになりました。

昭和 34 年、大阪に「保母会」が発足し、昭和 57 年 7 月、当時の会長、鶴飼百合子先生をはじめとした常任委員の皆様が、主としてブロック情報を交換し、お互いに研鑽を積み、保育内容の向上に少しでも役立てばという思いで「保母会だより」が誕生しました。

この頃の保育情勢は出生数の激減から定員割れが増える一方、保育へのニーズは多様化し、今では当たり前の乳児保育・長時間保育・障がい児保育の必要性が求められ、保育の役割が益々重要とされた時代背景が伺えるものでした。

## 変革の時、「ほほえみ」100号を迎えて 質の向上に取り組んだ歴史を刻む 保育ニーズに対応、役立つ機関紙めざし新たな一歩

大阪府保育士会会長 高田テルミ

昭和 60 年、武内茂子先生が会長に就任され、園長の会（現保育部会）のご協力で助成費をいただき、計画的に研修プログラムを進めることになりました。この頃から常任委員を研修委員と広報委員に分け、各々の活動を始めました。

平成 11 年、保母資格が国家資格となり、「保育士」の名称に統一されました。その年、なみはやドームで、園児・職員 2 千人が集まり盛大に大イベントが行われたことを思い出します。この機関紙も「ほほえみ」と改称し、51号からスタートしました。

平成 21 年、前会長の西潤子先生の時に、保育士会は発足 50 周年を迎え、記念式典が盛大に行われました。

そして今回、記念すべき 100 号を迎えられたことをたいへんうれしく思います。

創刊以来 33 年、「保母会だより」から「ほほえみ」へと変わっていく中で、世の中も

変化してきました。今や保育のニーズもさらに多様化し、園児のみならず、地域の子育て、家庭支援、そして社会貢献への取り組みも期待されます。

私たちは一層専門性を身につけ、發揮しなければなりません。

大阪狭山市の大野台保育園は今年創立 35 周年を迎えられました。子育て支援事業の歴史も古く、平成 5 年頃、市内の公民館や園のホールを舞台に、地域の子どもたちを対象にした遊びの集いを行ったのが始まりです。

現在は 1〜3 歳児対象の「あそびましょ」、0 歳児の親子が対象の「スマイルベベ」。毎週水曜日には園庭開放、育児相談を実施されています。

### 初めての子育てを多彩なメニューで支援 保育士のノウハウ地域に還元—大野台保育園

#### 子育て支援シリーズ ⑫



これまで「ほほえみ」の編集に携わってこられた皆様のご尽力に感謝し、今後も新しい情報を発信し、会員の皆様役に役立つ機関紙として、号数を繋げていきたいと思っております。どうか今後とも皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。

内容は、季節の遊びや年齢に応じた遊びを経験してもらえよう工夫を凝らし、夏には定番の泡遊びやジュース屋さんごっこなど、また伝統行事を知っていただく機会も増やしてほしいという要望も多く、保育園が担う役割は大きい」と、

「お母さん方からは、ほかの子どものようすが見られる、遊び方が学べる、母親同士の交流があり息抜きになる、といった感想をいただいています。このような機会をもっと増やしてほしいという要望も多く、保育園が担う役割は大きい」と、

また、母親が子育てに悩みを持ち始める頃、乳児の親子を対象に「スマイルベベ」を始められました。生後 4 ヶ月以降の赤ちゃんが集まり、片栗粉粘土などの感触遊びやスキンシップ遊びのほか、資格を持った保育士によるベビーマッサージ、離乳食講習会などの多彩なメニューを用意。同じくらいの月齢の赤ちゃんが集まるため、毎回子育ての話題で盛り上がり、若いお母さんにとって悩みを共有できる場となつていきます。

当たり前のことでも初めての子育てでは分からないことばかり。尋ねる人も機会も少ないうえ、やっていることが正しいかどうかかわからない。真っ白な状態から子育てを始められるのが実情でしょう。保育士が培ったノウハウを、園の保護者だけでなく、地域にも還元するため支援活動に力を入れていきたいと担当者は話されていました。（大阪狭山市 K・J）



●「睡眠時の安全」を

しっかり伝えて

新入園の季節ですね。

この時期は、これから1年間の保育活動について保護者にも見通しをもってもらい、「保育の大切さ」と同時に「集団で子どもたちが育つからこそ起こるリスク」も理解していただくべき時です。前回お伝えしたリスク・コミュニケーションがとても大切です。

特に今、必要なのは0歳児、1歳児等の睡眠中の安全の取り組みを保護者にしっかり伝えることです。乳児は睡眠中に突然亡くなる場合があります。このメカニズムもほとんどわかっていません。ただ、一定の確率で必ず起こりますから、乳児を預かる施設では「私たちの所でも起こりうる」と考えて予防に取り組んでください。「私たちが預かっている子どもたちは大丈夫」はありません。

① リスクの認識

● リスク・コミュニケーションの基本に沿って、次のようになります

① リスクの認識

たとえば、厚生労働省が出しているSIDS予防のリーフレットを印刷して渡すだけで、「私たちの園は突然死のリスクをちゃんと認識しています」というメッセージになります。「そんなことをしたら寝た子を起すだけ。保護者がよけいに心配する」とおっしゃる方もいますが、保育現場の安全に社会の注目が集まっている今、「うちの子を預ける園は大丈夫？」と

② 自園の取り組み 「睡眠中のリスクを下げるため、私たちは寝かしつけからあおむけ寝にしています」「あおむけ寝でもリスクをゼロにすることはできませんから、5分(10分、15分)ごとに呼吸のチェックをしています」と自園の取り組みを書いて、たとえば①のリーフレットにつけて渡し

③ 「ご家庭でも」の一言を

これはリスク・コミュニケーションではありません

が、せっかく厚生労働省などの情報を渡すのですから、「ご家庭でも、寝かしつけからあおむけ寝にしてあげてください」とひと言、書き添えましょう。「教えてもらった」という気持ちになる保護者もいるはずです。

学びシリーズ31

伝えたいことが伝わるお便り作り④

保育の安全研究・教育センター代表 掛札逸美

● 「社会的責任を果たしている」というメッセージ

「0歳児は突然死をする」ともあるのだから、園で亡くなってもしかたない、確かにそうかもしれない。「寝返りがうてるようになれ

ば、うつぶせ寝になった子どもをあおむけにひっくり返す必要もない。園の午睡チェックも必要ない」という意見も医療の中にはあります。

けれども、「他人の子ども」の命を預かる施設が「0歳児は亡くなることもあるのですから」「寝返りをうてるので大丈夫と判断しました」と言って社会的責任を逃れられるでしょうか？

「子どもの育ちにとって、小さな事故やケガは必要です。でも、私たちは命をしっかり守る努力をしています」と保護者に、そして、社会に伝えることが、今一番、大切です。そうしなければ、保育園で働く人たちの心と仕事は守れません。

● 4月の園だよりやクラスだより

リスク・コミュニケーションとはまったく無関係ですが、ひとつは、新任の保育士紹介などで「〇〇先生」と書いてしまっている園、クラスが少なからずあります。これは、大変な非常識

です。自分の組織に属する人には絶対、敬称をつけたい。園長であっても呼び捨てにする。これは、企業などで働いていれば当然のことです。保護者は「なにこれ、非常識！」と思うだけで、何も言っただけでいいです。

電話でも、「〇〇先生は今、いらっしやいません」「園長先生は保護者対応をしております」と言う方がいます。「〇〇は今、席をはずしています」「〇〇は今日、研修で外に出ています」「園長は保護者対応中です」が正しい言い方です。

● 子どもの育ちを支え、促す立場の保育者は一年間の抱負を

さらに、4月の園だよりやクラスだよりでは、保育者の抱負を書くことがよくあります。「子どもたちと一緒に一年間、楽しく遊んでいきます」「子どもたちと一緒に成長していきたいと思います」は、「保育の専門職」としては失格です。保育者が「楽しく過ごす」「子どもと成長する」

と保護者に向かって書くべきではありません。一年間、保育者としてどんな関わりを子どもと持っていたいか、新卒として、中堅として、ベテランとして、園長として、どう取り組んでいくかを書いてください。そうでなければ、「保育士って楽な仕事だね」「その程度なんだ」と言われても反論できません。

同じ内容は、3月の園だよりやクラスだよりでも出てきます。「子どもたちと楽しく過ごせました」はまだしも、「つらいこともありましたが、子どもたちの笑顔に癒されました」という文章もあります。もちろん「つらいこともあった」のは事実でしょう。でも、それを保護者に向かって書くのはお門違いです。

文章は、ただ書けば伝わるものではありません。ぜひ書いたものを園内で読み合うなどして、「誤解を生まない」「伝わりやすい」文章を書くスキルを育てていってください。

「保育の工夫—現場を訪ねて—」

# 食事・排泄など決まった保育士が 決まった子をお世話

## 「担当保育」取り入れ、安心できる 「第二の家庭」を—泉南市 たるい保育園—

たるい保育園（泉南市）では、子どももが中心、主体となる保育を目指されています。

家族と離れ、保育園という集団生活の場で安心して過ごすことができるように、今年度から育児担当保育を取り入れておられました。いわば保育園が子どもたちの「第二の家庭」になるように、というのがその考えの根底にあるようです。

まず、乳児期に生活の中心となる食事・排泄です。基本的に担当の保育士が関わり、決まった保育士が、決まった子どものお世話をされています。

「二斉保育」から「担当保



育」に変更することに、初めは戸惑いを感じる子どももいたようですが、今では集団の中で不安を感じることもなく過ごせる環境になっています。

また、特定の保育士と信頼関係が生まれることから、ほかの保育士に対しても信頼関係を築ききっかけになっているとのこと。食事の時間にも工夫があります。全員が一緒に食べるのではなく、登園時間や月齢などを配慮して、それぞれの子どもに合わせた時間に食事をとり、できる限り一人ひとりのリズムを受け入れ、発達に合わせた食事の援助を行うためです。

幼児期においては、自分で見通しをもって行動できるように、1日のスケジュールを写真付きで掲示されています。その結果、子どもたちが、今は何をやる時間なのかを自分で見て考え、

枚方市東部に位置する「明善保育園」は地域の子育て支援センターとして、また、近隣に数多い老人福祉施設との交流を通して、地域とのふれあいに重点を置いた保育をされています。7月の「七夕」、9月の「敬老の日」、12月の「クリスマス」には、子どもたちがデイサービスを訪問し、高齢者のみなさんとふれあい遊びを楽しみます。

その一つ『くっついた・くっついた』遊びでは、手と手、おしりとおしり、膝と膝、ほっぺとほっぺをくっ付けあってスキンシップ。園児のトントン肩叩きには、みなさん、とても気持ちよさそうに喜ばれると行動できるようになります。活動内容や準備物も単に言葉だけでなく、写真や絵文字で表示しておくことで、子どもたちが「わからない」と困ることも少なくなり、スムーズに集団生活を送れるようになったとのこと。子どもにとって「優しい保育」を目指して取り組ま

### 地域とともに ふれあい大切に

## 子どもの元気パワーを 施設や一人暮らしの高齢者に 途切れのない「ふれあい遊び」、お祝いの便りも 一枚方市 明善保育園



た七夕の短冊や笹飾りをプレゼントしたり、お土産にもらった千代紙で折った作品を再度訪問する時に持ち参、交流はつながっています。7月には高齢者グループの保育園への訪問があります。ヘルパーさんに介助された車いすの方が園庭に遊びに来られます。幼児が高齢者の方と楽しそうに遊ぶ姿、その様子を眺めている乳児たちも何かを感じとってくれている、それもまた大事な経験と感ぜられました。

このほか、みんなで書いてある方もおられるそう、改めて子どもたちの持っている元気パワーの威力に感じます。後記

### 後記

昭和57年、会員のみなさんの保育への溢れる思いを載せて始まった「保母会だより」。51号からは保育士への名称変更を機に「ほほえみ」へと変わり、この度100号を迎えました。その間、節目の行事はもちろん、日々工夫を重ねる保育の取り組みなど、心を込めた多くの記事が寄せられました。

同地区の一人暮らしの高齢者の会を通し、子どもたちの年賀状や敬老の日のお祝いのハガキを送り届ける取り組みも好評で、返事をくださったたり、絵本をプレゼントしてもらったこともあります。